銭形平次捕物控

毒矢

野村胡堂

青空文庫

一

「ヘツヘツ、ヘツヘツ、隨分間抜けな話ぢやありませんか」

ガラツ八の八五郎が、たがが外れたやうに笑ひながら、明神下の平次の家に笑ひ込むのです。

世間はまだ松が取れたばかり、屠蘇の香りがプンプンとして居やうといふ時ですから、笑ひながら來る分には、腹も立ちませんが、それにしても、かう不遠慮にやられては、御近所の衆が膽をつぶします。

「八の野郎がまた、ゲラゲラ笑ひながら舞ひ込んで來たやうだ。火鉢の中へ唐辛子でも燻して置け」

平次は苦々しく舌打をしますが、實は久しく顔を見せなかつた八五郎を、心の中では待ち焦れてゐたのです。

「それには及びませんよ。——可笑しいの可笑しくねえの——つて、ヘツヘツ」

「呆れた野郎だ。挨拶もせずに、笑つてやがる」

「相濟みません。尤も、元日早々御年始には來た筈で」

「挨拶は年に一度で濟む氣で居やがる。——何がそんなに可笑しいんだ。俺はもう、腹が立つて、腹が立つてたまらねえが」

「まだ正月だといふのに、何をそんなに腹を立てるんです。あつしはもう、面白くて可笑しくて」

「俺はまた癪にさはることばかりだよ。暮に拂へなかつた店賃を、三つまとめて大家のところへ持つて行くと、苦しいのはわかつてゐるから、そんな無理をするには及ばない、改めて盆にでも貰ふからと、そつくり返して來たぢやないか」

「ヘエ、それで腹が立つんですか、親分は」

「人を見くびるにも程があるよ。一人で腹を立てて居るところへ、八丁堀の笹野樣から、今年の正月は役向きの方が忙しくて、呼んで呑ませる折もなかつたから——と、屆けて下すつたのは、三升」

「ヘエ」

「縮尻つてばかり居る俺が、この酒が呑めるか呑めねえか考へて見ろ」

「そんなに癪にさはる酒なら、あつしが身代りに頂きますよ。三升もあると、ちよいと良いおしめりになりますね」

「舌嘗めずりをして居やがる。——その上あれを聽かないか、九月十五日の神田祭を待ち兼ねて、金があつて、暇で〳〵仕樣のない旦那衆が、界隈の若いのをおだてて、妻戀稻荷の後ろの大野屋を借り受け、初午の日に世直しの稻荷祭りの大騷ぎをやらかさうといふ企みだ」

「惡くねえ話ぢやありませんか。その話なら、あつしも掛り合ひがあるが」

「半月も前からの稽古で、夜も寝つかれやしない。飛んだ世直しだよ」

平次が腹を立てるのも無理のないことでした。江戸の有閑人達は、景氣が良いにつけ悪いにつけ、お祭り騒ぎをして、呑む機會を作らなければ、この世の中は張合ひがないやうな氣がするのでせう。

「あつしが笑つたのは、そのお祭りに出る所作事の話ですよ」

「そんな話なら、可笑しくも何んともないぢやないか」

「親分は——その日の所作に、坂屋のお妙が、新作の『江口』を踊るといふ話を聽いたでせう」

「坂屋のお妙といふのは、あの女か」

「ヘエ、あの女で」

この邊では、たゞあの女で通る坂屋のお妙は、妻戀稻荷の横に住む、何んとか流の踊りの師匠ですが、それは滿身にたぎる魅力を踊りにかこつけて撒き散らし、山の手一帶を桃色に興奮させるやうな大變な女でした。

「お妙が何を踊らうと、お前が可笑しがるわけはないだらう」

「それが大ありで、『江口の君』といふのは、昔々大昔の華魁だ。一休樣と掛け合ひの歌を詠んで、普賢菩薩に化けた——」

「お前の話は少し頓珍漢だよ。普賢菩薩が、衆生濟度のために、江口の遊君に現じたといふ話だらう」

「そんなことはどうだつて構ひませんよ。兎も角も、坂屋のお妙はその江口の君とやらになつて、象に乘つて所作事をする」

「普賢菩薩なら、象に乘るのは當り前だが、今時江戸に象は居ないよ、——それを豚の子で間に合せるとでも言ふのか」

「ところが、象が居るんですよ。——親分も知つて居るでせう、金澤町の岡崎屋三十郎、昔は大した家柄だが、近頃は商賣の方がいけなくなつた上、五年越しお妙に入れあげて、近頃はその日にも困るといふ、大變な落ちぶれやうだ」

「その岡崎屋三十郎が象になるといふのか」

「貧乏はしてゐるが、二十三貫といふ、水ぶくれの三十郎だ。裸になればそつくりその儘白象（びやくざう）ぢやありませんか。お妙がその上へ横乘りになつて、江口の遊女姿で、精一杯の色氣を撒き散らす趣向（しゆかう）と聽いて、あつしはもう、可笑しくて、可笑しくて、ウ、フ、フ、フ」

八五郎は三十郎が素つ裸になつて、象の振り宜しく、お妙に御せらるゝ馬鹿々々しさを考へて、たまらず腹を抱へるのです。

二

岡崎屋三十郎と、踊りの師匠のお妙との關係は、平次も一應は聽いて居りますが、八五郎の

説明で、その馬鹿々々しさが強調されて行くのでした。

お妙といふのは、五六年前何處からともなく流れて來た女で、素姓も人柄もわかりませんが、その藝は兎も角として、男好きのする非凡な魅力を持つて居たので、代る〳〵〳〵〳〵パトロンがつき、二三年のうちに、大變な人氣を集めてしまひました。色白で背が高くて、バネの入つたやうな身體——それは、昆蟲の美しさと、毒々しさと、そして限りない魅力の表現でした。

年は、何年か前から、二十五と言つて居りますが、本當のことは誰にもわかりません。皮膚はくすんだ眞珠色で、眼は赤ん坊のやうに、清純で碧々とさへして居りました。こんな眼は併し、測り知ることの出來ない、智慧と情慾とをかくして居ることでせう。

この女の最初の印象が、童女のやうに清らかなのは、その碧ずんで見える眼と、唇の素晴らしい曲線のせゐだつたでせう。肉色に襯せてゐるくせに、右左へ巻き上がるやうに食ひ込んだ曲線の美しさは、尊い佛の慈悲の相とも見られ、三千年の媚をたゝへた、ハガードの妖女の、邪惡な唇とも見られるでせう。

この女のために、身上をいけなくしてしまつた男は、何人あるかわからず、この女のために、命を失つた男も何人かはある筈です。かうした女は、男の怨みが燃えさかれば燃えさかるほど、その美しさを鍛へ上げられ、男の血を流せば流すほど、その智慧が逞しくなることでせう。

「何しろ、大變な評判ですよ。あの女の命を狙つて居るのが、ちよいと勘定しただけでも、五

人や三人はある中で、尻の毛まで拔かれたやうな、岡崎屋三十郎をこの寒空に裸にして、その背中の上で所作事をやらかさうと言ふのだから、これが無事に行きましたら、お目にかゝりたいくらゐのもので、ヘツヘツ」

八五郎は下司な笑ひを笑ふのです。

「岡崎屋三十郎は、そんな馬鹿なことを承知したのか」

「大喜びですよ。――さうでもしてやつたら、お妙が喜ぶだらうと」

「――」

「男が馬鹿になると、手の付けやうがありませんね。――神田で何番と言はれた岡崎屋を、一とたまりもなく身代限りをさせた上、女房のお美乃は乞食同樣になり、自分も落ちるところまで落ちてしまつて、その日にも困る仕儀になつても、まだあの女の後を追つかけて、野良犬のやうに尻尾を振つてゐるとは、何んといふことでせう」

「――」

「その上二十三貫の親豚のやうに肥つた身體を、裸になつた上、生身に白粉を塗つて、赤い腹掛に涎掛をし、立兵庫に髪を上げた、裲襠姿のお妙を乘せて、振事をやるといふから、あつしは笑つて笑つて笑つてやりましたよ。あんまり笑つたんで涙がこぼれた程で」

八五郎はさう言つて、惚れた者の哀れさを輕蔑するより、武士の情け見たいな悲痛な顏をして見せたりするのです。

「そこまで行くと氣の毒だな」

「他人の私でさへ可笑しくて、腹が立つて涙がこぼれますよ。乞食よりもひどい恰好で、取拂つたもとの店のあとに、犬小屋のやうな物置に住んでゐる、三十郎の女房。昔は岡崎屋の内儀のお美乃が、齒ぎしりして口惜しがるのも無理はありませんね」

「お妙には配偶はないのか」

「木之助といふ野幇間のやうな野郎が、昔の亭主だつたと言ひますが、これも一と身上をつぶした上、上方から追つかけて來て、今では、時々お妙の家を覗いて、お小遣にあり付いて居るやうだから、大した睨みも利きやしません。尤も余つ程痛いところを握つて居ると見えて、この男が貰ひに行くと、お妙も嫌とは言へないやうで」

「それつきりか、お妙には身寄りも何んにもないのか」

「妹が一人ありますよ。お菊と言つて十八の、良い娘ですが、これは又姉のお妙の妹とは思へぬ不縹緻で、眞つ黒で、横太りで、朝から晩まで、下女代りに働いて居まさア——姉のお妙は二十五と言つても、二つや三つはサバを讀んでゐるだらうが、妹のお菊は十八と言つても、うけ合ひ二十二三には見えますよ。——尤も本當の姉妹でないといふ話もあるが、そこまではわかりません」

「——」

「外には、安五郎といふ男が一人居ます。下男だか庭掃きだか、居候だか知らないが、二十二

三のこれはのつぺりした野郎だ。尤も生れは、松前とか奥州とか、餘つ程北の方で、訛がひどいから、話は半分しかわかりません。鼻の曲つた鮭みたいな野郎だが、色が白くて背が高くて、飛んだ好い男ですよ」

「それつきりか」

こんな馬鹿々々しい話を、平次は神妙に聽いて居りました。妖しく美しい踊り手お妙をめぐつて、何んとも説明の出來ない豫感があつたのです。

三

二月四日の初午、妻戀坂の大野屋に、底抜けの遊びが始まりました。江戸の有閑人たちは、名目さへ立てば、時も處も構はずに、茶番狂言、お温習、手踊り、素人芝居――と、果てしもなく享樂を追ひ求めるのでした。

それは、權力と因習に押し付けられてゐる、日頃の屈托に對する、僅かな息抜きでもあり、若い娘達を集めての、戀の狩人達の冒險でもありました。

その日の番組の馬鹿々々しさと、賑やかさは、今更語るまでもないことでせう。番數も進んで、夜の亥刻（十時）近くなつて、大切に出したのは、坂屋のお妙の踊る『江口の君』新作の踊りで、一休禪師には、名ある歌舞伎役者が附合ひ、一流の出語り、贅澤過ぎるほどの舞臺裝

置、大道具小道具にも贅を盡して、大野屋の大廣間の幕が開いた時は、集まる客の數は百人を超し、思はず歡聲をあげたのも無理のないことです。

金糸銀糸の刺繍をほどこした裲襠、天地紅の玉章を、サツと流して、象の背に横様に乗つた立兵庫、お妙の美しさは、人間離れのしたものでした。

その普賢菩薩を乘せた白象といふのは、二十三貫の大男、全身に白粉を塗つて、赤い褌をした岡崎屋三十郎の、醜くも淺ましい姿です。振事が眞面目であれば眞面目であるほど、人々の哄笑は、潮が去來するやうに、夜の空氣と、囃子方の鳴物を壓して、どつ、どつと波打ちます。

その間にも普賢菩薩のお妙が、人間象の背の上で、兎もすれば安定を失つて、見物がドツと笑ふのが、囃子方の鳴物や、地方の唄を壓して、氣が遠くなるほど、夜の空氣を搖すぶります。

「たまらねえな、こいつは」

見物に交つた八五郎は、兩手を揉み合せて、獨り悦に入るのを、並んで見て居る平次が何遍肱で突いたかわかりません。

普賢菩薩のお妙が、象から滑り落ちさうになると、あわてて、その象の首に獅噛みつきます。普賢菩薩のお妙の神々しいばかりの美しさに比べて、三十郎の象の顔が、何んと醜く淺ましいことか。

「八、もう歸らうよ。こいつは見ちや居られないよ」

平次もさすがに嫌になりました。惚れ拔いて、金も見識も、見榮も命も要らなくなつた男の、

世にも淺ましい見本を見せられるやうな氣がして、吐氣を催すやうな胸の惡さを覺えたのです。

やがて振事が濟んで、最後の見得になりました。舞臺正面、描いた後光の前に立つて、江口の君なるお妙が、昇天の菩薩の形になるのですが、鳴物につれてその座に直ると、

「あつ」

お妙の普賢菩薩が、三十郎の白象の背から、ズルズルと滑り落ちたのです。舞臺の上に飛び散る血。

「どうした、師匠」

お妙の身體を抱き起したのは、白象の三十郎でした。續いて、ドツと立ち騷ぐ人垣、鳴物も踊り手も後見も、不意の出來事に驚きながらも、この美しい犧牲を、八方から擔きあげたのです。

「どうしたどうした」

「目を廻したのか」

「いや、刺されたのだよ」

大勢の手で抱き起されたお妙は、最早頼み少ない姿です。

やゝ遠く距れて、踊りを見て居た平次と八五郎は、立ち騷ぐ人々を掻きわけて、一瞬のうちに、お妙のところへ飛び付いて居りました。

「退け〳〵、皆んな退いてくれ」

平次がさう言ふのにつれて、

「まご〳〵しやがると掛り合ひだぞ。お妙を殺した下手人は、この中に居るに違ひない」

八五郎は、彌次馬を追つ拂ふ術を心得て居ります。

四

あとに殘つたのは、白象の三十郎と、お妙の後見をして居た、妹のお菊と、それから平次と八五郎の四人でした。

「醫者だ、醫者だ、早く、早く」

八五郎が怒鳴ると、大野屋の若い者が心得て飛んだ樣子です。

三十郎の腕の中に、ガツクリとうな垂れたお妙は、もう最後の痙攣に、僅か生命の名殘りを止めるだけでした。不思議なことに、傷は二つ、白くて丸い右の喉笛に突つ立つたのは、ヒヨロヒヨロした楊弓の矢で、もう一つも同じやうな楊弓の矢、これは左の眼の下をかすめて、後ろ幕の裾に落ちて居るのでした。

矢は二本共楊柳の枝で造つた本格のもの、どんな急所を射たところで、人の命などを奪れさうな代物ではありませんが。

醫者が來る前に、お妙の命は絶えました。平次はそつと喉笛に突つ立つた、楊弓の矢を引拔

いて見ると、これは何んと、唯の楊弓の矢と違つて、その根は一種の鏑になり、毒蛇の首のやうに、不氣味なフクラミを持つて居るのです。

醫者を待つてゐるうちにも、三十郎の悲嘆は目に餘りました。裸になつて、赤い褌をしめて、赤い腹掛をかけ、全身に白粉を塗つた三十男が、見榮も外聞もなく、女の死骸を掻き抱いて、ワアワア泣き騒ぐのです。

それも、義理や誤魔化しで泣くのではなく、聲をあげて泣く姿は、譬へやうもなく醜怪で、八五郎などは、

「確りしろ、大の男が何んといふザマだ」

などと、間違つたやうな顏をして、二つ三つどやし付けた程でした。

やがて驅けつけた醫者は、金澤町の奎庵といふ五十年輩の坊主頭でした。お妙が死んで居るのを見て、

「あ、たうとう」

醫者に似氣ない、含みのあることを言ひます。

「奎庵先生、これはどうしたことでせう。楊弓の矢で、人間が頓死をする筈はなく、それに、眼の下も喉も急所は除けて居るし、この通り血がいくらも出ないところを見ると、命に拘はる傷ぢやないと思ふが――」

平次がさう聽くのも無理のないことでした。

「尤もだが、錢形の親分。よく見てくれ、この喉へ突つ立てた矢は、唯の矢ぢやないよ」
「？」
「矢尻が、煙管の吸口のやうになつて居るだらう、――この鏑の中になにか入つて居るに違ひあるまい」
「？」
「嗅いで見るが宜い、少し脂臭いやうだ。ね、その通り。そこで、その鏑の中へ、松前のアイヌが熊狩りに使ふといふ、毒をつめたとしたら、どういふものだらう。これくらゐの傷で、人一人殺すのは、毒矢の外にないが」
「どうして、そんなものを？」
平次もあまりのことに、二の句が繼げません。
「毒は――南蠻物でなければ、アイヌが使ふといふ、鳥兜の根を煉つて、膏藥のやうにしたものだ。――それを誰がやつたか、其處まではわからない。では、あとのことは、錢形の親分に頼みましたよ」
醫者の奎庵は、一人呑込んで立去つてしまひました。
「親分、お客様をどうしたものでせう。これだけ多勢居るんだから、皆んな調べたひにや、夜が明けてしまひますよ」
舞臺の不氣味さを避けて、家中の隅々に、思ひ〳〵に集まつて、言葉少なに様子を見てゐる

のが、ざつと百二三十人もあつたでせう。八五郎がさう言ふのを聞いて、多勢の眼が平次の方に向ひました。

「皆んな歸してくれ、いつまでも引留めちや氣の毒だよ」

「大丈夫ですか、この中に下手人が交つて居るに違ひないんだが」

「大丈夫だとも、出來心でやつた人殺しぢやない。あとで手繰つたところで、差支はあるまい」

「さうでせうか」

八五郎は不安でしたが、それでも平次がさう言へば、一應歸す外はありません。

五

多勢の客を歸したあとが、平次の舞臺でした。殺されたお妙と、深い關係のあるものだけ、五六人を殘して、平次の調べは其處から始められたのです。

大野屋の大廣間、晝から外神田一圓を見おろして、なか〳〵の景色ですが、火鉢を一カ所に集めて、殘された人達は、寒々とした顏を集めて居ります。

平次はその隣りのいつもは樂屋に使ふ八疊を借りて、一人づつ呼出して見ました。

第一に呼出されたのは、當夜の勸進元で、この催しの金主で、お妙のパトロンになつて居る、神田鍛冶町の金貸、佐渡屋金兵衞。これは五十五六のいかにも迷惑さうな、そのくせやゝ

高慢な感じのする禿頭でした。

「いやもう迷惑なことで、——あの女は浮氣で剛情で、手のつけられない女でしたが、御存じの通り、千人に一人といふきりやうで、親分の前だが、大した女でしたよ」

非凡な素質に恵まれた、稀代の妖婦お妙を喪つて、佐渡屋金兵衛は惜しさうに舌嘗めずりをするのです。

こんな野郎があるから、世の中が面白くないんだ。——さう言つた心持で、禿茶瓶を睨んで居る八五郎は、飛びかゝつて横つ面でも張り倒しさうな氣組でした。

「そのお妙を怨んでゐる者も少なくないやうだが」

平次が穏かに訊くと、

「そりやもう、お妙を殺したいほど怨んでるのは、私の知つてるだけでも五人や六人ぢやありません。先の亭主の木之助などは、いつか一度は殺して見せると言つて居たさうで、その癖時々お小遣をせびりに來るのだから、内々はお妙大明神だつたかも知れませんよ」

金兵衛の話は妙に行届いて、氣になるほど機微を穿ちます。

「それから？」

「象になつた岡崎屋三十郎さんはあの通り、お妙のために、大きな身上を潰した上、女房にも別れ、恥も外聞もない身になりながら、いまだにお妙にヘバリついて、泣いたり口説いたり、この寒空に裸になつたり、——惚れた男といふものは、淺ましいものですね。尤もあれはお妙

を殺す氣なんかありやしません。燒いて粉にして酒で飲む方で、ヘツ、ヘツ」

「――」

金兵衞がヘラヘラ笑ふと、八五郎はでつかい拳骨を拵へて、夜の空氣の中に、唸りを生ずるほど振り廻して居ります。

「お妙を一番怨んで居るのは、三十郎さんのお神さん、もとの岡崎屋の内儀のお美乃さんでせうよ。あれだけの店まで賣つて、その跡に小屋をかけ、乞食のやうな暮しをして居るのですから」

「下男の安五郎と、妹のお菊は？」

「安五郎も、お妙に氣があるんでせうな。給金なしで、あんなに働いて居るくらゐだから。お菊の方は、ありや、妹といふのは嘘で――顏を見たつてわかるでせう。妹分といふことにして、下女の仕事をさせて置くのは、人を使ふ秘傳ださうで、これはお妙が自慢をして居りましたよ。――時々貰い物の菓子か、お菜のお裾わけでもやれば、給金がなくても、喜んで働いてくれるとね。――尤も、禿頭の私がその眞似をしたところで、私共の店では、奉公人は三日と居付いちやくれません、綺麗な女は得ですね。ヘツ、ヘツヘツ」

ヘラヘラ笑ひを殘して、金兵衞が去ると、八五郎は楊弓の矢を二本持つて來て、眼の色を變へて平次にさゝやくのです。

「ね、親分。この矢を灯の下でよく見ると、矢筈の下の漆の上に、金文字で『岡三』と書いて

ありますよ」

「何んだと」

「岡崎屋三十郎は、まだ暮しのよかつた頃楊弓に凝つて、かなりの腕前だつたさうですよ。あの野郎ぢやありませんか」

八五郎の鼻は蠢めきます。

「いや、背中にお妙を乘せて居て、楊弓を射られるわけはない」

「さう見えばさうですが」

「お前は岡崎屋三十郎の家を知つてるだらうな」

「知つてますとも」

「あの内儀をそつと連れて來てくれ。嫌がるかも知れないが」

「やつて見ませう。お妙が殺されたんだから、せめて、その面でも見てやれとか、何んとか言つて」

「餘計な細工をするな。——どうしても嫌だと言つたら、亭主の三十郎が、お妙殺しの疑ひで、縛られるかも知れないと言へ」

大呑込みで八五郎は飛んで行きます。

續いて、お妙の前の亭主であつたといふ、木之助が呼出されました。

これは七つ下がりの袷を引摺るやうに着て、小紋の羽織を引つかけた、三十二三の青黒い男

で、昔は隨分好い男でもあつたでせうが、病身と貧乏に押負かされて、ヒヨロヒヨロになつて居る癖に、色氣と慾だけは、存分に身について居ると言つた感じの男です。

「お妙があんなことになつて、良い氣味でしたよ。——さう言ふと私が下手人見たいですが、——飛んでもない。あの時私はお帳場で、大野屋の番頭さんと話して居たんですから、どんな口を利いても、疑はれる心配はありません。——あの女は、あんな最期を遂げるのも約束事ですね。浮氣で慾張りで、男をゴミほどにも思つて居ませんでした。現に、お菊や安五郎はうまい事を言はれて、三年越し唯で奉公してゐるし、あの女の爲に身代をいけなくした男は何人あるか、勘定しきれません。——私はあの女の弱い尻を知つてゐるので、大きい聲で言ひ觸らされるのがいやさに、蚊の涙ほど貢いで居ましたが、水の手がきれさへすれば、私だつて殺す氣になつたかもわかりません」

木之助の言ふことは、まことにヌケヌケして居りますが、その口幅つたい言ひ草から考へても、下手人らしくはありません。

六

下男の安五郎は、見事な男でした。少し縮れつ毛で、背が高くて色白で、髭の跡が青々として、なか〳〵の男前です。

言葉はひどい訛りで、半分は聽き取り兼ねましたが、そのメラメラと燃えるやうな眼や、唇の赤さなど、男にしては珍らしい特徴です。

「お前は何處の生れだ」

「松前で生れましただよ。——江戸へ來て二年になりますだ。給金は貰はねえが、時々お小遣は貰ひました。——師匠さんは、良い人だつたよ、誰にでも親切で——」

ボソリボソリと噛んで吐き出すやうな言葉です。

「奉公人なら身許引受人はある筈だが」

「そんなものはゐねえだ。給料を貰わねえから、身許なんか、何んだつて宜かんべえ」

なるほど、さう言つた理窟もあるでせう。

その次に呼んだのはお妙の妹と言ふお菊でした。十八九、——どうかすると二十歳以上にも見える頑丈な娘で、横肥りの赤ら顔の、申分なく醜いくせに、何處かに娘らしさがあり、その素朴さが、妙に人の好感を誘ひます。

「房州の生れですが、親はありません。奉公してから三年になりますが、お師匠さんはよくして下さいました。『私は一人ぼつちで親も姉妹もないから、妹分になつて、お互ひに助け合つて行かうぢやないか』とお師匠様が言つて下すつて、それから三度の食べ物も、一緒に頂きました。そして私も、給金を頂かずに、働くことにいたしたのでございます」

この話の中には、何やら腑に落ちないものがありますが、平次はそれはそれとして、

「お前は下男の安五郎をどう思ふ」

突然こんなことを訊くのです。

「さア、別に」

「お前達の間に、何にか約束があつたのではないかな」

「いえ」

お菊は眞つ赤になつて、平次の引留めるのも構はず、隣りの部屋に逃げ込んでしまひました。

その隣りの部屋、皆んなが待機してゐる、曉近い大廣間には、此の時、一と騒ぎが始まつて居りました。

「嫌、嫌だといふのに、この人は何んといふ解らない人だらう。貧乏はして居ても、私はまだ三十前だよ。こんな身扮をして、人の前へ出られるかどうか、考へて見ておくれ」

さう言つて、入口の戸に獅噛みついたまゝ、必死の抵抗を續けるのは、二十五六の見すぼらしい女でした。みすぼらしいといふにも程度がありますが、二子の柄も縞もわからぬ腰巻の上に、ヨレヨレの印半纏を引つかけて、猫の百尋のやうな三尺帶、髪は埃だらけで、蒼黒く痩せた顏は、この世の者とも思へぬ凄まじさです。

「何を言ふんだ。お前の亭主の三十郎は、お妙殺しの下手人で、縛られかけてゐるんだぜ」

「嫌だつたら、嫌さ。私はもうあの人の顏なんか、見たくもない。處刑臺に乘りや、宜い氣味ぢやないか、畜生ツ」

女だてらにこんな口をきいて、入口の敷居の前に坐り込んだまゝ、必死と八五郎に反抗するのです。

七

その時平次は、岡崎屋三十郎の調べを始めるつもりで、大廣間に入つて來ました。白象になつた三十郎は、さすがに肌寒かつたものか、小女が持つて來てくれた、自分の着物を肩に引つ掛け、お妙の死骸の側に、首うな垂れて居ります。

大の男が痴呆と醜體の限りを盡して、たいして恥入る風もありませんが、それでも時が經つにつれて、曉方の風が身に沁みると、いくらかは本心を取戻した樣子です。

「錢形の親分、——聽いて下さい。皆んな申し上げますが」

三十郎は平次の顏を見ると、急に正氣づいたやうに膝行り寄るのでした。

「どうしなすつた、岡崎屋さん」

平次は少しわざとらしく丁寧に應へました。

「私を縛つて下さい、錢形の親分。お妙を殺したのは、この私でございます」

三十郎は立ち上がつて、平次の袖に縋り付かうとしましたが、興奮して見當が外れたものか、空を泳いで、ペタリと尻餅をつくのです。

「何を言ふのだ、三十郎さん」
「私は、お妙の阿魔に、勝手にされ過ぎました。この上あの女を生かして置いちや、生きながら地獄の底まで陥ち込むに違ひないと思ひ、一と思ひに、手馴れた楊弓で射殺しました。お妙を殺したのは、この三十郎に間違ひもありません。その證據は楊弓の矢には金蒔繪で一々私の名が『岡三』と描いてあります。さア、この私を、――私を縛つて下さい」
三十郎は一生懸命でした。藻掻くやうに平次に縋りついて、赤ん坊見たいにわめくのです。
「何を言ふのだ、楊弓の矢はお妙の眼の下をかすつただけだぜ」
「いえ、もう一本の矢が――」
「その矢は、鏑になつた矢尻が重いから、楊弓ぢや飛ばない」
「それを私は、手に持つて、お妙の阿魔の喉へ突つ立てました。私が」
「その矢を、踊りを踊る間、何處に隠してゐたんだ」
「私の、象の腹掛の下へ」
「嘘を言つちやいけない。腹掛の下に隠せば、矢尻の毒が腹掛へ附く筈だ。矢の根は脂のやうにベトベト粘つて居るぜ」
「でも」
「お妙を背中に乗つけて、楊弓を射られるわけはないし、毒矢を隠す場所がないとわかると、――」

「いえ、私が殺しました。あの阿魔は、踊りが濟めば掴み殺して、一緒に地獄へ落ち込む氣で居ました」

三十郎は今度は本當に、身を顫はせて泣くのです。

が、その時、もう一つの事件が發展しました。入口の敷居際で、八五郎と爭ひ續けて居た、三十郎の女房のお美乃は、遙かに三十郎の樣子を見ると、八五郎の手をかい潛つて、今度は、尻切半纏(しりきればんてん)のまゝ、自分から進んで大廣間に飛び上がるのです。

「お前さん、——私だよ、私だよ。家から楊弓を持出して、あの女を射たのは。私はあの女の眼を射潰(いつぶ)して、片輪にしてやりたかつたのだよ。皆んな踊りに夢中になつて居る隙に、私は雨戸の隙間から、あの女の眼を狙つたのだよ。——眼には當らなかつたけれど、あの女は、たうとう死んでしまつたぢやないか、天罰だよ、天道樣は無駄には光つちや居ない。サア、あの女を殺したのは、亭主なんかの意氣地無しぢやない、この私だよ。錢形の親分、縛つておくれ。磔刑柱(はりつけばしら)を背負はされたつて、私は怨(うらみ)には思はない」

「本當か、矢つ張りお前がやつたのか」

「さア、私はもう、——」

お美乃はこの時始めて、側に居る亭主の三十郎を意識したやうに、すがり付いて、大泣きに泣くのです。

暫くの間平次は、三十郎とその女房の、感情の激動を眺めて、何んにも言はずに居りました。

五六人殘つた關係者は、大廣間の隅に引つ込んで、劇の一と齣を眺めるやうに、この不思議な夫婦の演出を見て居ります。

「もう宜い、――二人共歸つてくれ」

「？」

「お妙を殺したのは、二人のうちの、何方でもないよ。二人は何處へも行かずに、あのもとの岡崎屋跡の小屋へ歸るのだ。一文商ひでも始めるなら、お妙へ入れ揚げた講中へ、奉加帳を廻して少しくらゐの資本は集めてやるぜ。――今までのことは夢とあきらめて、今日から新規蒔直しに踏み出すんだ」

「――」

三十郎とお美乃は、平次にさう言はれると、始めて自分に立ち還つた樣子です。

「それぢや」

二人はうなづき合ひました。そして、手を合せて平次の方を拜んで居る三十郎を、女房のお美乃が引立てるやうに、緣側から霜の降りた曉天の往來へ、いそ〳〵と姿を隱すのです。

「八、もう歸らうか」

「ヘエ？」

それを見送つて平次も立ち上がりました。

「夜の明けきらねえうちに歸つて、熱い茶でも呑んで寢るとしようか」

「下手人はどうするんです？　親分」
「この裁きは、閻魔様に任せるよ。どりや」
平次は八五郎を促して、人々のけゞんな顔に見送られるやうに、霜の道を踏み出すのでした。

×　×　×

道々の八五郎の不服らしさ。
「大丈夫ですか、親分。お妙を誰が殺したんです。下手人は？」
「もう宜いよ八。下手人は手に手を取つて逃げ出してしまつたよ」
平次はけろりとしてこんなことを言ふのでした。
「すると、あの、三十郎とお美乃の――」
「いや違ふ。三十郎は何んにも知らないし、お美乃はお妙の眼を射潰したかつただけさ。楊弓の矢は外れて、お妙は顔をやられただけだ。――素人の手ぎはぢや、少し遠過ぎたから、無理もないが」
「すると曲者は？」
「楊弓の矢尻を換へて、毒を仕込んだ鏑矢で、お妙の首筋を刺した人間が下手人さ」
「ヘエ？」
「あの鏑矢は重いから、楊弓では四五間もある庭先から飛ぶ筈はない。三十郎は裸に赤い腹掛一つで、あんな重くて長いものを隠し持つてる筈はないし、あとは、お妙の側に居たのは誰だ

と思ふ」
「さア？」
「氣がつくまい。——踊りの後見をして居た、お菊だよ」
「あの妹分の？」
「妹分といふことにして、三年も唯でコキ使はれた上、深く言ひ交した好い男の安五郎を横取りされると、十八や十九の娘でも、ツイ取逆上せるよ。松前から來た安五郎が、熊狩の毒を持つて居るのを知つて、それをそつと持ち出し、岡崎屋の三十郎が、いつかお妙のところへ持つて來て忘れて行つた、楊弓の矢の根を、鏑矢の根と入れ換へて、その中に毒を仕込んだのだらう」
「それぢや、引つ返して、あの安五郎とお菊を縛りませう」
「止せ〳〵、二人はもう奥州街道へ踏み出したよ。松前へでも落ち延びて、熊の子と一緒に暮す氣だらう。——俺が三十郎夫婦を調べて居る頃、手に手を取つて逃げ出したやうだ」
「すると親分」
「お前は默つて居ろ。餘計なことを言ふと、俺がまた笹野の旦那に小言を言はれる」
「呆れたものですね」
「俺も呆れて居るよ」
「もう一つ、わからねえことがあるんだが、——毒を仕込んだ、鏑矢の根は、何處から持ち出

したんでせう」

「お宮へ行けば、鏑矢の一本や二本は何處にでも奉納してあるよ。深川の三十三間堂へ行つて見ねえ、半堂や四半堂に使ふ、子供づかひの鏑矢まで納めてあるぜ。毒を射込むには、あんな良いものはありやしない」

「成る程ね」

「本矢は持つて歩けねえから、鏑矢の根だけ取つて、楊弓の矢にはめたのさ」

「器用なことをやつたもので」

「側に居る者を殺すんだから、それくらゐの工夫は要ることだらうよ」

平次の家はすぐ其處、女房のお靜は寢もやらずに、二人の歸りを待つて居るのでせう。

青空文庫情報

底本：「錢形平次捕物全集第三十三巻　花吹雪」同光社
　　1954（昭和29）年10月15日発行
初出：「キング」
　　1954（昭和29）年1月号
※題名「錢形平次捕物控」は、底本にはありませんが、一般に認識されている題名として、補いました。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：門田裕志
2016年12月22日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銭形平次捕物控
毒矢

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

著者　　野村胡堂
URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/